



小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

概要編

1989

長野県飯山市教育委員会

はじめに

国道117号線バイパスは、あい路打開と高速交通網へのアクセス道路として改良・整備が行われてきています。小沼湯滝バイパスは、湯滝～柏尾橋間は整備が整い昭和62年12月に供用が開始されています。昭和63年度から柏尾橋～大倉崎間が計画され、常盤大橋の橋梁建設が計画されることになりました。

ところが、このルートの中には日焼・南原・屋株・大倉崎館跡・上野・大倉崎の計6遺跡が存在しています。そこでこれら貴重な文化遺産が、工事によって破壊される前にせめて調査を実施して、後世に記録をとどめようということで発掘が行われることになりました。

調査は、飯山建設事務所の依頼で飯山市教育委員会（浦野昌夫教育長）が実施しました。昭和63年度対象となった遺跡は、上記6遺跡のうち、日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡の4遺跡です。

発掘作業は、蒸し暑い夏の7月12日から雪の降り積もった11月22日まで、休むことなく連続して続けられました。発掘総面積は、4,700㎡にもおよび飯山市でもかつて無い大規模な発掘事業となりました。それと同時に、各遺跡において大変貴重な資料を発見することができました。詳細な記録は本編に記載されていますが、本書はその概要書です。

なお、各遺跡の調査においては、地元の方々より多大な御協力を頂きました。ここに心から御礼申し上げます。

遺跡発掘データ

遺跡名	所在地	発掘期間	発掘面積	主要出土遺構・遺物
日 焼	飯山市 大字瑞穂豊字南原1170—3 ほか	S63 7.12～8.12	1,700㎡	先土器時代石器・礫約2,100点
南 原	大字瑞穂豊字南原1192 ほか	7.12～8.12	800㎡	縄文時代陥穴・石器剥片
屋 株	大字瑞穂字北原4840 ほか	8.18～9.30	1,200㎡	縄文時代陥穴・平安時代竪穴住居 先土器時代石器・縄文前期土器 平安時代土器
大倉崎	大字常盤字外和柳3921—27 ほか	9.28～11.22	1,000㎡	平安時代土塚墓・中世館跡 平安時代土器・中世陶磁器・鉄 製品・銭貨・石臼

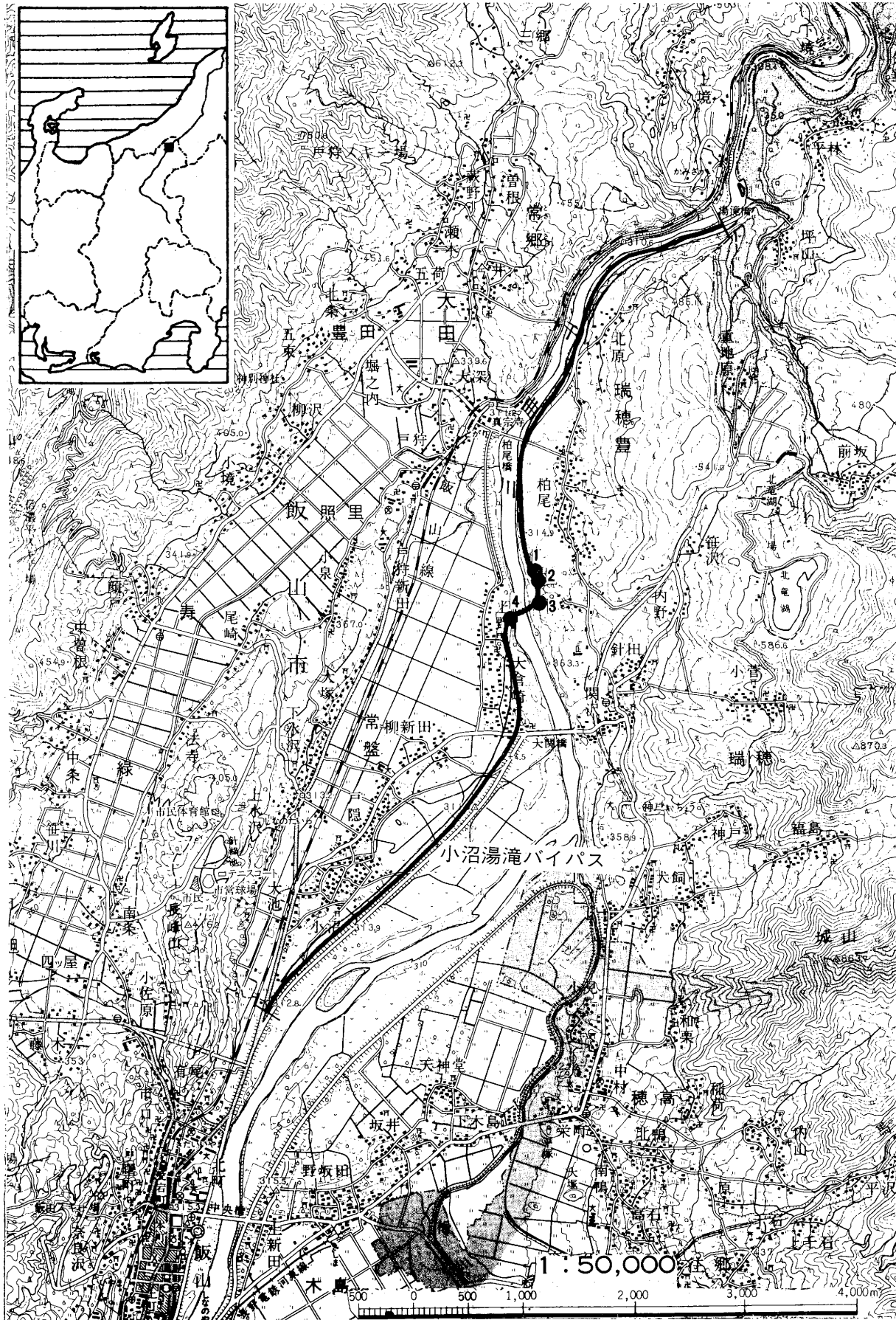
各遺跡の変遷

年	約 12,000年前		2,000		1,000				
	先土器時代 (旧石器)	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古 奈 良	代 平 安	中 鎌 倉	世 室 町	近世 江戸
日 焼	■								
南 原		□		□					
屋 株	■	■				■			
大倉崎	□	□		□ □		■		■	

□ 遺物が少量出土

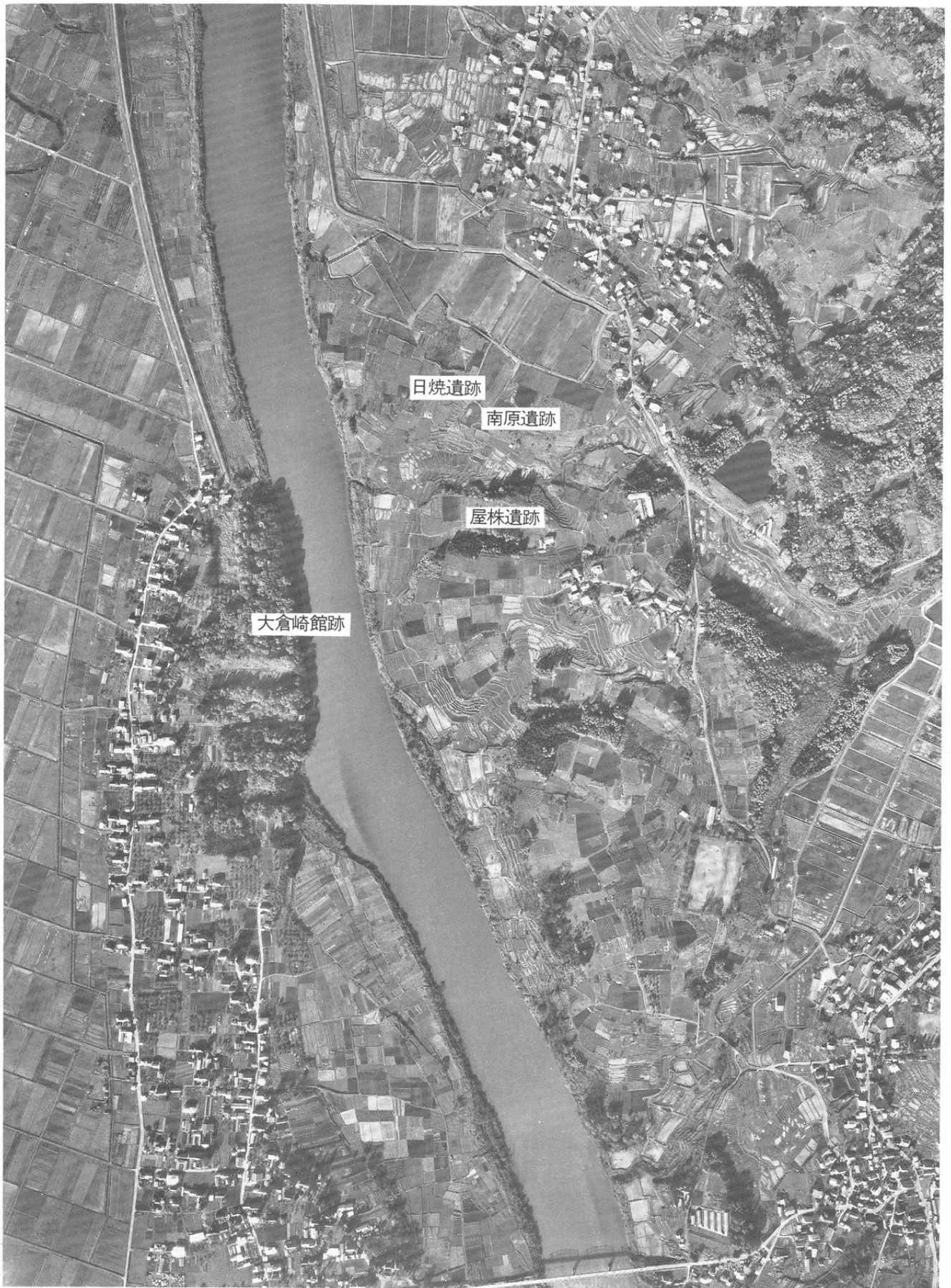
■ 遺物が多く、痕跡がある時期

遺跡群の位置



1. 日焼遺跡 2. 南原遺跡 3. 屋株遺跡 4. 大倉崎館跡

空から見た遺跡群



1. 日焼遺跡の概要

日焼遺跡は、瑞穂柏尾地区の南西にあり、7月12日～8月12日まで1ヵ月調査を行いました。その結果、赤土の中から約13,000年ぐらい前の所産と考えられる先土器時代（旧石器時代）の石器が、約2,000点と多量に発見されました。

石器の種類は、ものを切ったり組み合わせの刃として使用するナイフ形石器、肉や骨を削る搔器・削器、皮に孔をあける錐、槍先に使用する尖頭器、木を削る礮器など多種多彩にあります。

石器は、調査したところ全面から出土するわけではなく、ある「まとまり」をもって出土するのが一般的です。このまとまりを「群」と呼びますが、日焼遺跡では6群見つかっています。この6ヵ所の群はそれぞれの内容から、1群ははっきりしませんがほぼ同じ時代の生活の跡と考えられます。あるいは各群は1軒単位の家とも考えられます。

この時代の飯山地方は、いままでどちらかというと東北日本的な石器文化といわれてきました。しかし、日焼石器群は今迄言われてきた文化と少し違った内容を持っています。それは、和田峠付近を原産地とする黒耀石を多量に使用し、南関東地方の石器とよく似た形態を示しているということです。その意味でも今回の調査の意義は大変大きいといえます。

なお、この時代は幾分温暖化してきているとはいえまだ氷河時代でありました。この厳しい時期に、飯山盆地の千曲川河岸に居を構えた人達はどう暮していたのでしょうか。人々が土器を発明し、それによって食生活をはじめ格段の進歩となった縄文時代には、もうしばらく待たなければならなかったのです。

（文責 望月静雄）



戸狩堤防より対岸の日焼・南原・屋株の各遺跡を望む。日焼遺跡は▼印より千曲川河岸まで広がっている。南原遺跡はその上段に、屋株遺跡は中央右端の丘にある。

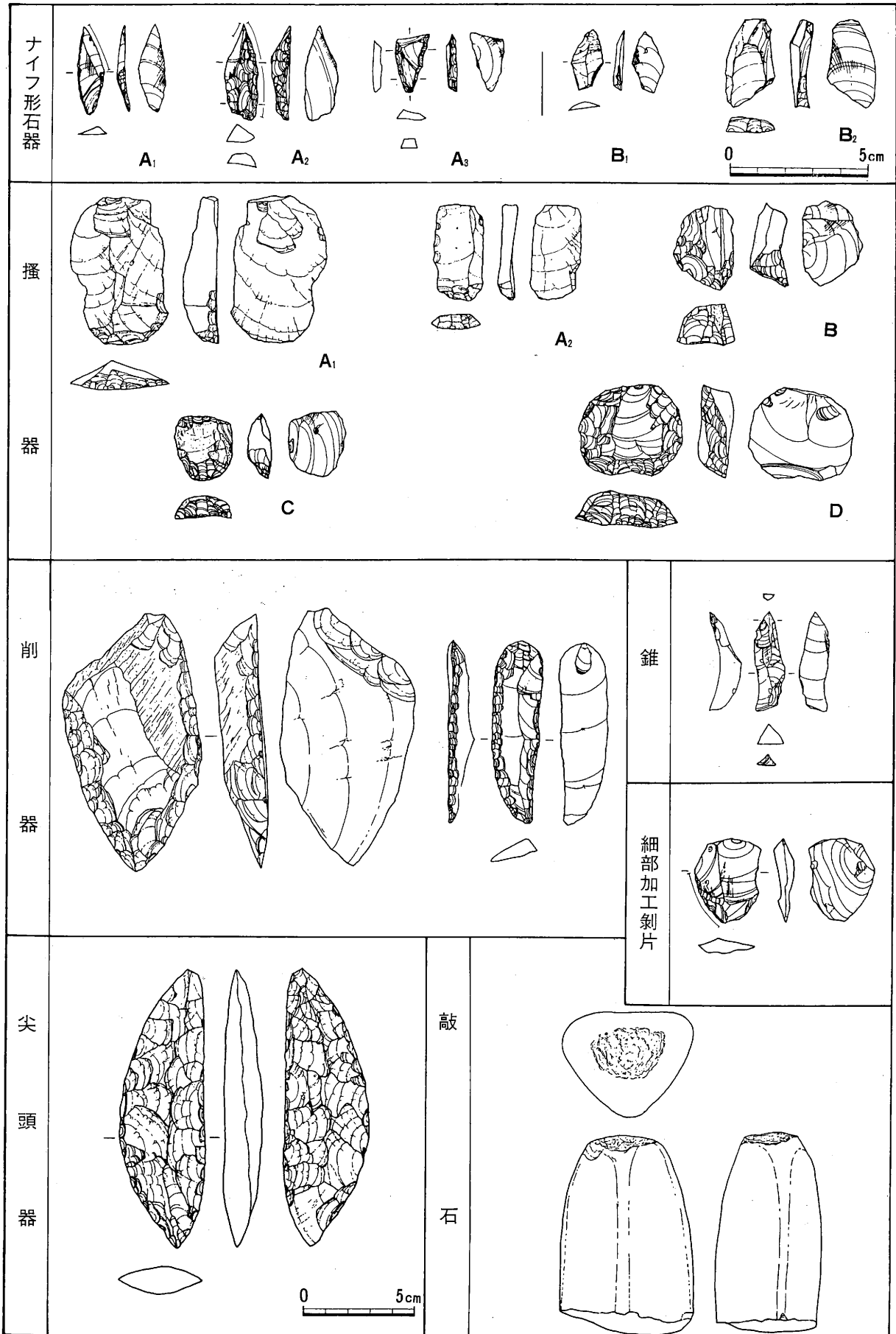


白い荷フダのところがすべて石器の出土したところ。真夏の暑い時期に堅い赤土を人力で掘るのは容易でない。



調査に携わった人達（発掘終了時、昭和63年8月12日撮影）

石器のかたち (4:5)



出土した石器1



出土した石器2



2. 屋株遺跡の概要

屋株遺跡の調査は1988年8月18日から9月30日まで行いました。調査の結果、屋株遺跡は先土器時代、縄文時代前期、平安時代のそれぞれの人が使った石器や土器、そして平安時代の住居址がでてきましたので、狭い河岸段丘上の遺跡ではありますが大変重要な遺跡と位置づけることができます。

約1万3千年前からこの地に人が住み生活を営んできたという事実を真摯に受けとめて欲しいと思います。遺跡全体からみれば、調査は東側約1,200㎡だけでしたが、これだけの事実が発見されたわけです。

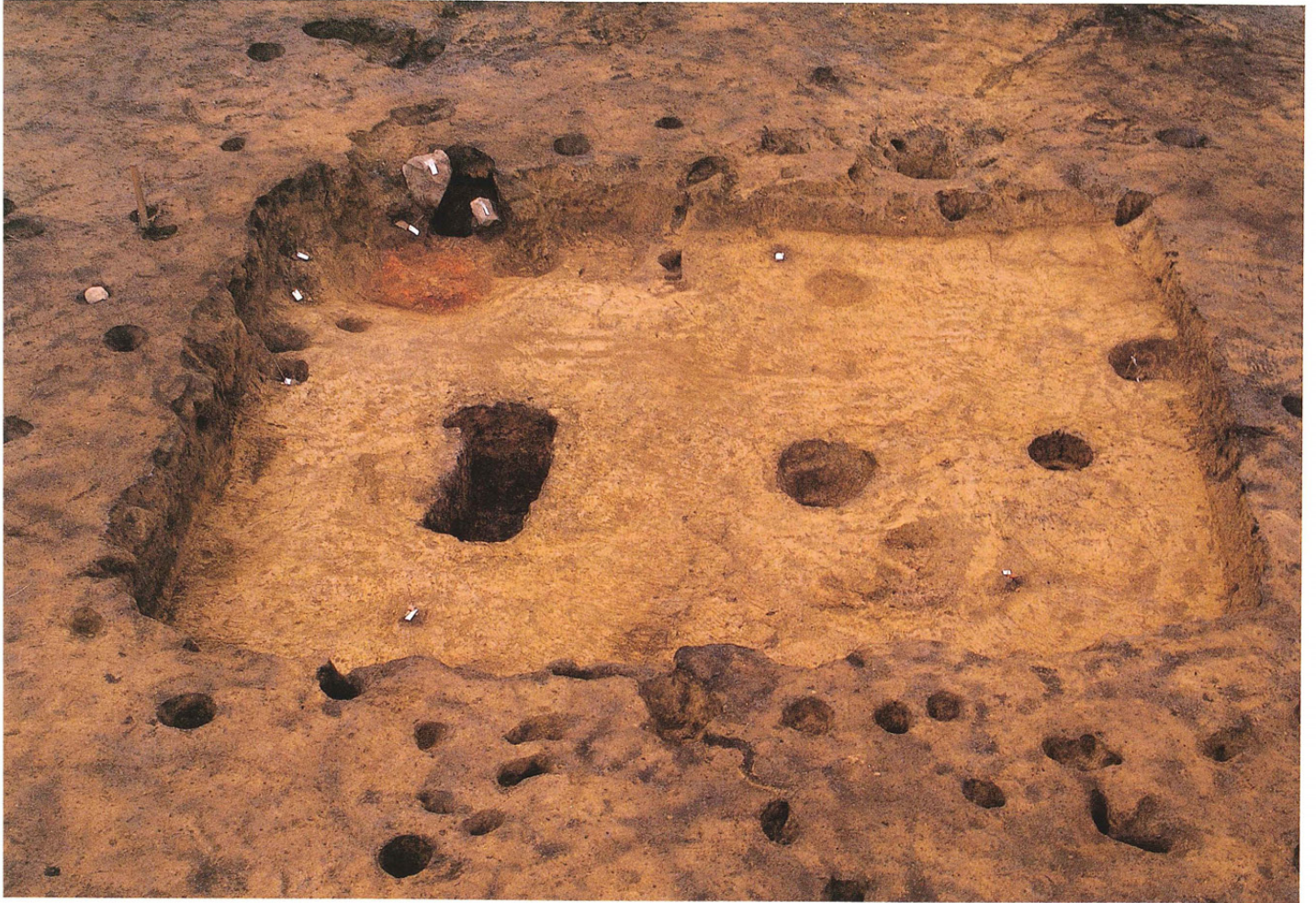
先土器時代に属する石器が約100点出土したことです。そのほとんどは安山岩で作ったものですが、頁岩や黒曜石のものもありました。縄文時代前期の土器も、100片以上出土しました。あいにく破片が少なく、この土器がどのような形となっているかについては分からなかった点が残念です。

平安時代の土器については、数量的に言えば一番多く出土しました。総計で1,000片を越えると思います。その中でほぼ完全な形で発見されたのが灰色のお椀で3個あります。直径15cm位でそう深くありませんが、その1つには裏に「加」の字が墨で書かれていました。その他内側が黒色のお椀が2個程復元できました。それと口径19cmの甕上半部分も復元できています。須恵器のお皿2枚やフタなども復元しています。この他に住居址からは炉壁と思われる固まりが、高熱のために溶けたような形として数個出土しています。

この遺跡の特徴といえるのが縄文時代の陥穴が合計8つ検出したことです。しかも北側に面したところで扇形に展開している陥穴が5つあった点が目立ったことです。最近では市内遺跡の中で、このような陥穴の検出は屋株が有尾・北原・南原遺跡に次いで4番目のことと思います。また、平安時代の遺構の中には、土器が集中して出土した焼土壇、そして柱穴が無数に発見されました。 (文責 高沢秀徳)



▲ 作業風景



▲平安時代の竪穴住居址（北から左上角がカマド跡）



▲出土品

3. 大倉崎館跡の概要

大倉崎館跡（上野館跡）は、現在の^{うえの}上野集落の東の山中にある、中世（鎌倉・室町時代）の館跡です。館は、東を千曲川の断崖に接し、北・西・南の三方を、幅10m、深さ5m以上の雄大な外堀で囲んでいます。外堀の長さは、北辺が34m、西辺が104m、南辺が42mです。

外堀に囲まれた郭内の広さは約1600㎡（1.6反）で、三方を土塁で囲み、北隅の一画は他より一段高くなっています。

郭内には、発掘の結果、礎石ではなく、土を掘って柱を立てた、掘立柱（ほったてばしら）建物が建っており、郭のまん中にも内堀的な堀があったことがわかりました。

出土品

出土品には、中国から輸入された白磁や青磁の椀や皿や壺などの高級品や、遠く北陸地方の珠洲焼（すずやき）・越前焼（えちぜんやき）の大甕、美濃・瀬戸等の天目（てんもく）茶椀や香炉、中国銭、鎧の一部の小札（こざね）などの鉄製品、茶臼・硯、全国でもきわめて珍しい火鉢など、予想以上の貴重な品がありました。

白磁・青磁は食器として、美濃・瀬戸等の陶磁器は茶や香などの嗜好品として、大甕は水甕として使われたのでしょうか。豪華なものです。

小札の出土は、武士がいたことを連想させます。

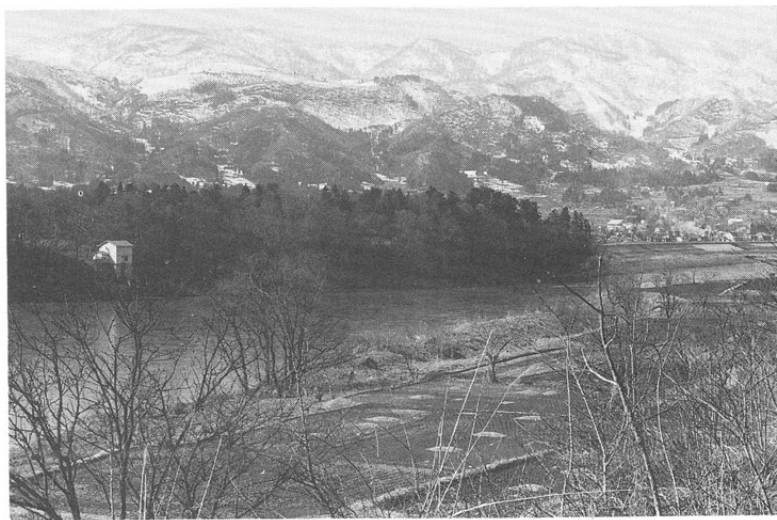
これらの出土品は火をうけているものが多く、また発掘地から炭や灰が多量にみつかったので、当館は火ぜめに逢ったのでしょうか。

館の時代

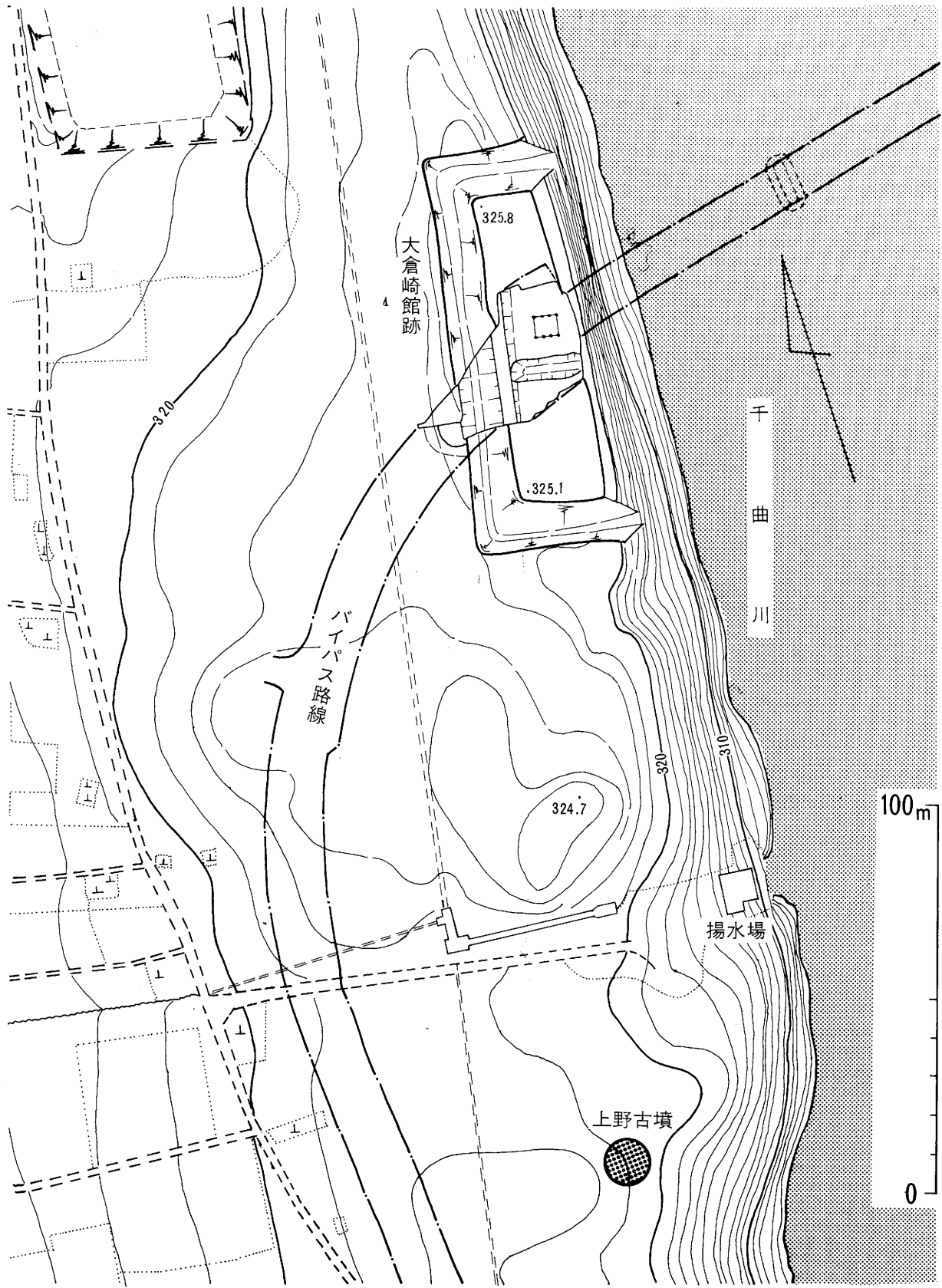
大倉崎館があった、鎌倉・室町時代は、織田信長や豊臣秀吉が全国統一をする戦国時代の前の時代で、時の中央政権の地方官である信濃の守護に対して、土着の豪族が土地の権利をめぐる相ついで反乱した争乱の時代でした。大倉崎館に住んでいた「お館様」が守護側であったのか、反守護側であったのかわかりませんが、その争乱に関係していたことはまちがいありません。

なお、大倉崎館跡が竹内源内の居城であったという言い伝え（『村史ときわ』140ページ）や、殖野左衛門次郎（『新編瑞穂村誌』195ページ）との関係については今のところよくわかりません。

（文責 常盤井智行）



◀ 館跡遠景
（千曲川上流から望む）

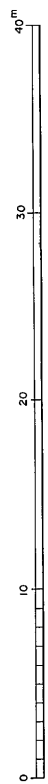


館跡周辺地形図 (1 : 1,500)

大倉崎館跡測量図 1:400



1988年10月水際線

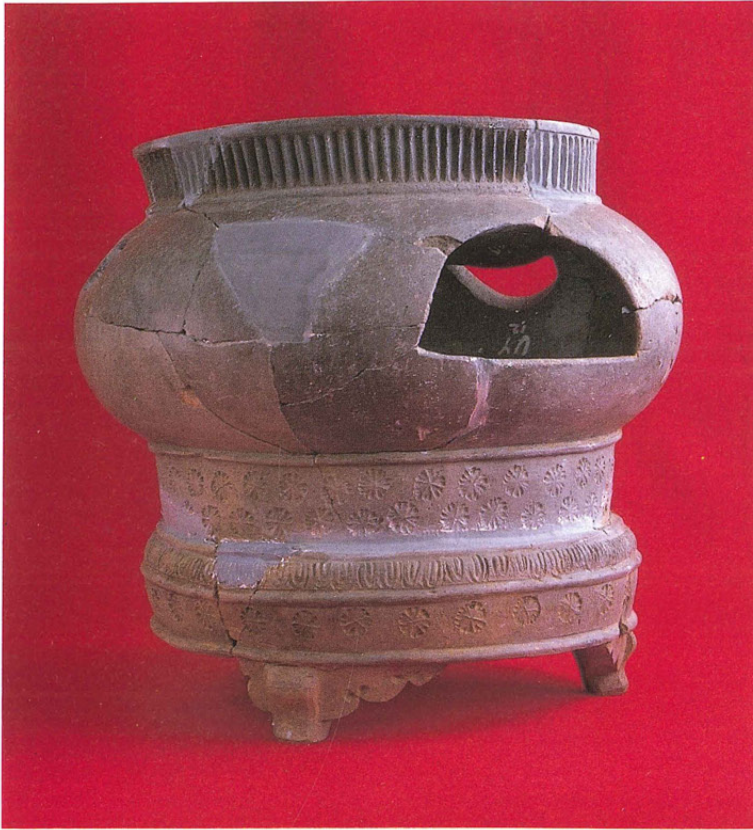




▲土塁と郭内の堀（手前）



▲外堀・土塁上から堀底まで5 m



▲ 陶磁器

文様のある白磁・青磁の椀・皿・小壺・壺・八角小坏

◀ 瓦質火炉 (火鉢)

右側の窓から炭を出し入れた
茶道具の風炉(ふうろ)に似ている



◀ 陶磁器

左 天目花瓶、三足香炉 2 点 (天目・灰釉)

奥 青磁盤 2 点

中 青磁椀 中右 青磁皿

手前 白磁小皿 3 点

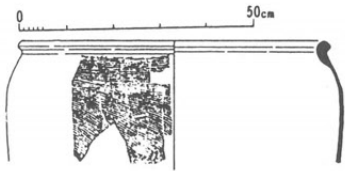


◀ 陶磁器

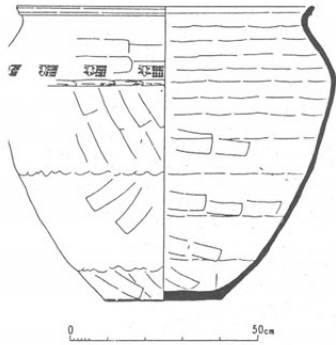
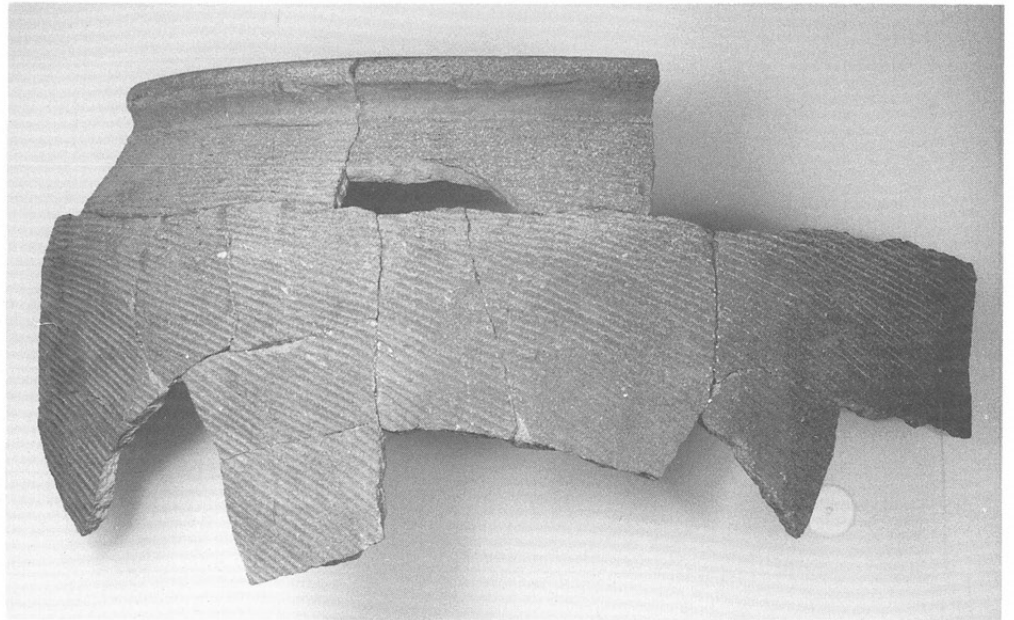
左 青磁椀・皿 6 点

右下 白磁小皿 1 点

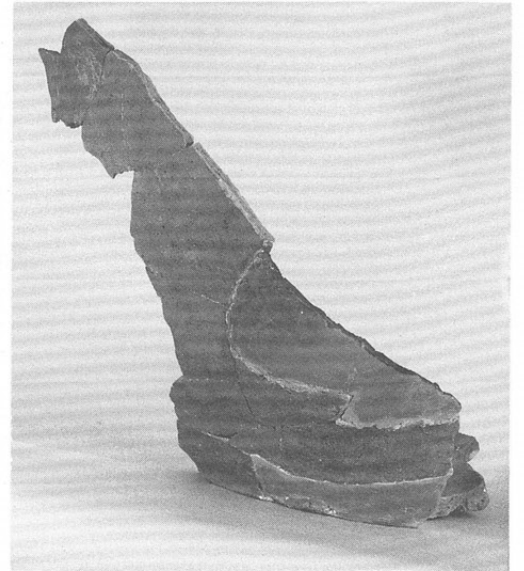
右 天目茶椀・花瓶・盤 5 点



▲ 珠洲焼の大甕



▲ 越前焼の大甕

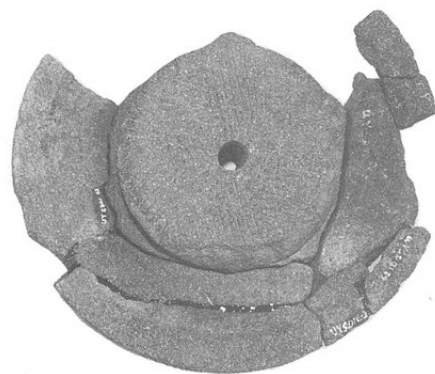


銭貨▶





▲鉄製品と非鉄製品（左側の6点）



▲茶臼



▲珠洲の大甕，マーク入りの口縁



▲カマ元のマークが入った珠洲の大甕



▲「真」の墨書，平安土器2点

国道117号線関係遺跡調査会名簿（昭和63年度）

顧問	小野沢 静 夫（飯山市長）	委員	佐藤 昭（市公民館瑞穂分館長）
会長	浦野 昌 夫（飯山市教育長）		岸田 正（市公民館常盤分館長）
副会長	佐藤 清（飯山市教育次長）		村田 巖（市建設課監理係長）
委員	高橋 桂（飯山市文化財審議委員）		西川 允 久（市建設課監理係主査）
	阿部 武 義（飯山市議会議員）	事務局	清水 宏（市教育委員会次長補佐 兼 社会教育係長）10月1日転出
	藤沢 賢一郎（飯山市議会議員）		渡辺 博（市教育委員会社会教育係長） 10月1日転入
	川久保 広 良（飯山市議会議員）		望月 静 雄（市教育委員会社会教育係）
	丸山 岩 夫（柏尾区長）		森崎 ツギ子（市教育委員会臨時職員）
	吉越 吉 三（関沢区長）		
	小出 幸一郎（上野区長）		
	鈴木 一（大倉崎区長）		

調 査 団

団 長	高橋 桂（飯山南高等学校教諭）
調査主任	常盤井 智行（市教育委員会埋蔵文化財調査員）
調査員	高沢 秀徳（市教育委員会埋蔵文化財調査員）
	望月 静雄（市教育委員会社会教育係）

調査参加者（順不同・敬称略）

- 小林元造 丸山長治 小林みさを 望月てる 阿藤光友 小林勇 出沢吉重 出沢重忠 望月俊一 出沢利雄 鈴木清五郎 望月直吉 沼田真蔵 望月祐二 岸田今朝二 増山盛三 小林重治 山崎満枝 坂井昇 山本香 綿田茂実 鷺野吉太郎 鷺野家康 吉越古寿 小林とき
- 岸田幸夫 岸田康夫 増山正直 丸山栄一 吉平周三 丸山信行 川久保茂樹 阿籐幹雄 丸山三男 山崎義雄 小林治 山崎幸雄 増山保範 丸山満（以上柏尾地区地蜂の会）
- 新免悟 田沢春樹 川久保世念子 川久保安保 丸山英樹 丸山多津子 増山典子 服部由美子 小林義幸 岸田雅樹 小境啓之（以上高校生）
- 小林経雄 竹内大五郎 北条辰男 大森信衛 沼田多久治 鷺野吉太郎 梨元智年 小坂ハツエ 鈴木ため 丸山信隆 太田勇 万場昇一 鈴木常男 丸山淳一 佐藤まさの 丸山さだお 鈴木はな江 小林一枝 丸山広士 小坂いさお 小坂三次 鈴木操 梨元スガ 中原博志 万場義秋 万場くに 万場はま 小出まさ子 万場きよの 徳永愛子 中原トヨ 万場とみ子 徳永よ志江 万場恭枝
- 小林龍子 北山けさえ 柳孝子 中塚盛子

遺物写真撮影

田村規城（市教育委員会埋蔵文化財調査員）

協力者

田沢良夫（柏尾公民館長） 望月邦男（前柏尾区長） 川久保善美 鈴木元義 万場喜三郎 万場喜一 中原信 小林精一郎 中原英吉 万場義秋 山崎良典 小林欣一（柏尾副区長）

小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告 I

概 要 編

平成元年3月25日発行

発行者 飯 山 市 教 育 委 員 会

編集者 国道117号線関係遺跡発掘調査団

（団長 高橋 桂）

印刷者 飯山市大字常盤

有限会社 岸田孔版印刷所